



館長だより

日本カモシカ

日本カモシカが国の特別天然記念物に指定されたのは、1955年のことです。理由は大きく三つあるようです。第一に、日本固有の哺乳類として学術的価値が極めて高いこと。第二に、かつて乱獲によって個体数が激減し、絶滅の危険が現実味を帯びていたこと。そして第三に、急峻な山岳地帯に生きる独特的の生態が、文化的・自然史的に貴重と判断されたためです。山形県はその主要な生息地の一つであり、県獣に指定されているのも、こうした歴史的背景と深い関わりがあります。

カモシカは「鹿」と名が付いていますが、実際にはウシ科に属し、ヤギやヒツジに近いものです。体つきはすんぐりとして、黒褐色の毛が密に生え、冬にはさらに厚い毛皮に包まれます。山形の厳しい冬を越えるための装備です。雪深い山中で、彼らは蹄を巧みに使い、岩場を跳ねるように移動します。急斜面を苦もなく登る姿は、まるで山そのものと一体化しているかのようです。

興味深いのは、カモシカが「縄張りを持つ」動物である点です。特に雄は自分のテリトリーを樹木や岩に擦りつけた臭腺で示し、侵入者に対してじっと睨みつけるように立ち尽くします。あの独特の「にらみ合い」は、山で出会った人々の記憶に強く残ります。実際、私も以前、西吾妻に登山に出掛けた折など、じっとして動かずにこちらを見つめるカモシカと何度か遭遇いたしました。これは攻撃の意思ではなく、警戒と威嚇の混ざった行動で、彼らなりの距離の取り方なのです。

食性もまたユニークです。カモシカは草食ですが、木の葉や若芽だけでなく、コケや地衣類まで食べます。山形のブナ林やミズナラ林は、彼らにとって豊かな食卓でもあります。冬になると食べ物が乏しくなるため、樹皮をかじる姿も見られます。こうした多様な食性は、厳しい環境に適応してきた証です。

さらに、カモシカはほとんど群れをつくりません。親子以外は単独で行動することが多く、静かに、淡々と山の斜面を歩きます。人里近くに姿を見せることもあります。基本的に孤高の生き物です。

天然記念物に指定された当時、カモシカは絶滅寸前だったと聞きます。しかし保護政策が功を奏し、現在では生息数が回復しています。とはいえ、森林環境の変化や人里への出没増加など、新たな課題も

山形県産業科学館

令和8年2月4日(水)

発行 館長 加藤智一

生まれており、農作物被害が問題になることがあります。これは単純に増えすぎたからではなく、山林の植生変化や気候変動が背景にあるとも考えられます。カモシカは環境の変化を敏感に映し出す「指標種」でもあるのです。

文化的な側面にも触れておきましょう。山形では古くからカモシカが山の象徴として語られてきました。詳しい出所は分かりませんが、村山地方の民話にはこんな話があります。『山の恵みを取れるだけ取るのが当たり前だと思っていた木こりが、逃げるでもなく、威嚇するでもなく、ただじっと見つめる一頭のカモシカに出会い、まるで人の心の奥を覗き込むような、静かで深い光を宿した瞳が「ここから先は入るな」と言っているようで恐ろしくなりました。そしてその夜、木こりは不思議な夢を見ます。白髪の老人が現れ、「山は生きておる。お前が伐ろうとした木は、山の守り木じや。これ以上、山を荒らさない。」木こりがはっとして目を覚ますと、夢の中の老人の姿が、昼間のカモシカの目と重なりました。翌朝、木こりは昨日の場所へ行ってみると、カモシカが立っていた場所のすぐそばに、苔むした古い石碑があるのを見つけました。そこには「山神」と刻まれていたそうです。木こりは悟りました。「あれは、山の神の警告だったのだ。」それ以来、木こりは山の木を必要以上に伐らず、山の恵みに感謝して暮らすようになりました。村人たちもまた、カモシカを山の神の使いとして大切にするようになったと言います。』カモシカの静かな佇まいは、山の神秘性を象徴する存在だったのでしょう。

また、その昔、カモシカの毛皮は貴重な防寒具として重宝されていました。乱獲が進んだ背景には、こうした生活文化もあったと思われます。しかし、天然記念物指定によって狩猟は禁止され、カモシカは山形の自然を象徴する「守るべき存在」へと変わりました。

人間の生活圏が広がり、自然との距離が変わった今でも、彼らは変わらず山の斜面を歩き続けています。雪の中でじっと佇む姿は、まるで山形の冬そのものの静けさを体現しているようです。

